

医療現場でのリハビリテーションと病院食についての調査

1年3組 篠原ほのか

1年4組 稲葉 眸

1年4組 猪野木拓未

1年4組 清原 美咲

1年4組 曾根 汐梨

指導者 教諭 豊水 貴博

1 課題設定の理由

私たちが住んでいる南予地域は特に少子高齢化が進んでいる。このまま少子高齢化が進んでいくと、医療費の増大や労働人口の減少など、さまざまな問題が起こることが予想される。少子高齢化の問題は、私たち自身が今後直面していく問題があり、医療現場でのリハビリテーションの内容や病院食などについて調査することによって今後の課題を見つけ、私たちがどのような社会づくりをしなければならないかを考えるためこの主題を設定した。

2 仮説

- ・南予は介護福祉サービスが必要とされる高齢者(60歳以上対象者)の割合が高いのに対し、リハビリテーションを行える施設や専門家が少ないのではないか。
- ・病院食はあまり種類がなく、おいしくないのではないか。

3 実験・研究の方法

- ・インターネットでの調査
- ・市立宇和島病院での取材調査
- ・宇和島保健所での訪問
- ・資料からの情報収集

4 結果と考察

(1) リハビリテーションに携わる専門家の仕事内容

ア 理学療法士

診療の補助として理学療法を行う。事故などで身体に障害を持った人に対して基本的動作能力の回復を図る。

イ 作業療法士

身体障害や精神障害を持った人に対し、手芸や工作などを通して応用的動作能力の回復を図る。

ウ 言語聴覚士

音声機能、言語機能又は聴覚に障害のある者について、対処法を見出すために様々なテストや検査を実施し、評価を行った上で、機能の往生を図るため、必要に応じて訓練、指導、助言その他の援助を行う。

エ 管理栄養士

傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、個人の身体の状態、栄養状態等に応じた高度の専門的知識および技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導をする。

(2) 市立宇和島病院での取材調査結果（平成25年11月7日）

ア リハビリテーションの仕事に必要な資質

- ・純粋にこの仕事に就きたいという気持ち。
- ・目標に向かって努力を続けることができること。
- ・人の話に耳を傾けることができること。
- ・コミュニケーション能力

イ リハビリテーションの仕事をしてやりがいを感じる事

- ・患者の状態がよくなり、患者の顔が生き生きしてきた時。
- ・初めは言うことを聞いてくれなかったが、徐々に心を開いてくれ、感謝の手紙をもらったこと。

ウ リハビリテーションの仕事をして大変なこと

- ・やはり患者の状態がよくならないこと。患者のモチベーションが下がり、リハビリが進みにくくなること。
- ・患者の状態によっては正常な状態に近づけるのが難しいこともある。

エ リハビリテーションに携わる専門家の数は需要に対して足りているのか

- ・施設も専門家の数は、足りていると思うが、今後さらに高齢化が進むので、こういう職に尽きたいと思うのならばぜひ目指してほしい。ただし、進学する大学や専門学校が今は数多くあるので、その中から取得できる資格やカリキュラムなどをしっかり調べてから、努力してほしい。
- ・介護職は仕事の内容もきつく、給料もあまりよくないので若い年代の介護職に従事する人が少ないという課題がある。

オ 病院食について

- ・カロリーや形状などは患者さんの病状や病気によって変えている。その中で栄養価が高く、できるだけおいしくなるよう工夫している。節分やクリスマスなどの行事には、巻き寿司やケーキなどを出すのだが、患者から人気がある。
- ・退院後の食生活も大事なので患者の家族への栄養指導や嚥下食の調理方法の講習なども行っている。

5 まとめと今後の課題

(1) 病院食について

最初は「美味しそうにない」「味が薄そう」などあまりよい印象がなかった。しかし、病院へ直接訪問し、さらにインターネット等で調査していくうちに、病院食は管理栄養士や調理師が様々な工夫をし、患者の病状に応じて栄養価が高く、見た目もよく、味もおいしいことが分かった。

(2) 医療現場でのリハビリテーションについて

私たちが住む南予地域は高齢化が東・中予に比べて高齢化が進んでいるが、予想に反して施設や専門家の数は足りているということが分かった。しかし、若い年代の介護職に従事する人が少なく、この状態を維持し、また改善していくためには、まだ多くの課題が残されていることが分かった。それらを踏まえ、私たちは高齢者が安心して暮らせる社会を築くために、高齢社会を理解し今後の日本を支えていかなければならない。